



電話と文学——声のメディアの近代

黒田翔大 [大阪人間科学大学等兼任講師／近代文学] = 著

定価：本体 **4500** 円 [税別] / A5判上製 / 224 頁



目次

- 1 文学における電話前史——遅塚麗水『電話機』に描かれた電話
- 2 「受話器」という比喻——夏目漱石『彼岸過迄』の敬太郎を通して
- 3 「満洲国」内における電話の一考察
——日向伸夫『第八号転轍器』、牛島春子『福寿草』から
- 4 占領期における電話空間
——安岡章太郎『ガラスの靴』に描かれた破局
- 5 「電話の声」と四号電話機の影響
——松本清張『声』とその前後の推理小説
- 6 電話社会のディストピア——星新一『声の網』に描かれた未来社会
- 7 電話に付与される場所性
——中上健次『十九歳の地図』における脅迫電話

近代文学は、電話をどのように描いてきたのか？

一対一でプライベートに交わされることの多い電話は、その性質上、記録が残りにくい。しかし、文学は物語の中で電話を豊かに描いてきた。電話事業が開始された明治期から、固定電話が普及する昭和戦後期の文学作品を、電話に着目して読み直す。

- ・電話事業開始直前の作品は、電話の未来をどのように描いていたのか？
- ・電話が新しいメディアだった頃の作家・漱石は、電話をいかに作品に取り込んだのか？
- ・多言語地帯であった戦時下の「外地」において、電話がもたらした接続と断絶とは？
- ・音質が格段に向上した四号電話機の普及は、ミステリー小説をどのように変えてしまったのか？
- ・昭和のSF小説が予期した、固定電話によるインターネット社会とは？

株式会社 七月社 ☎182-0015 東京都調布市八雲台 2-24-6 電話 / FAX : 042-455-1385

帳合・番線 注文数 冊	発行：七月社 電話：042-455-1385
	黒田翔大=著 電話と文学——声のメディアの近代 A5判上製 / 224頁 / 本体 4500円 / ISBN978-4-909544-21-6 C1095

ご注文は JRC へ / FAX **03-3294-2177** *返品条件付き注文扱い * JRC 経由ですべての取次への出荷が可能です